

keito

あいのうたうたう

凍てつく寒さも少しずつ和らいで、景色も新緑に色付きつつあった。肌を切るように冷ややかだった風も、いまはずいぶん柔らかい。庭に植えられた桜の新芽も、だんだんとやってくる春を心待ちにしているようだった。来週にも咲き出すだろうか。

うららかな春の気配が近づいてきていて、わたしの心は晴れない。

「おとうさーん。そろそろ準備するよー」

わたしは洗いたてのシーツを庭先に干しながら、寝室にいる父に声をかけた。返事をしているのかはわからないが、こちらの声が聞こえてさえいればいい。去年の暮れに父は重い病気をわずらった。体だけは丈夫な父だったのに、この病気にだけはなかなか打ち勝つことができない。今年に入って自宅療養に切り替わってからは、毎週土曜日が通院日になっている。わたしたち家族が顔をあわせる日でもあった。姉はすでに結婚して郊外へ引っ越していたが、手伝いをしに夫婦でやってくる。いつも姉の旦那さんが病院まで車を出してくれた。

母はわたしがまだ幼い頃にすでに他界しているので、土曜日はわたしの家族が勢揃いする日になる。もうすぐ姉たちがやってくる頃だろう。手早く準備を済ますべく、わたしは急いで家事をこなした。

午後三時を過ぎて病院から戻ってくると、ようやく一息ついた。旦那さんは一足先に帰っていて、父は疲れて眠っていた。わたしは姉と一緒に台所で羊羹をつまんだ。

「父さん、また少し痩せたんじゃない？」

姉が浮かぬ表情をして小さく切った黒い塊を口に放り込む。

「そうかな？ あんまり変わってないと思うけど……」

定期的に体重は計っているが、それほど変わってないはずだ。

「やつれたのか。着々と、近づいてきているのかな」

「やめてよ、お姉ちゃん」

姉は週に一度、会いに来るだけなのでわずかな違いにも敏感だ。私は毎日、父を見ているので些細な変化に気づきにくいのかもしれなかった。少しずつ父から生が失われてきているのだろうか。

「ま、できる限りのことはしよう」

そう口にした姉は、まるで私に言い聞かせているかのようだった。いわれなくても、わたしははなからそのつもりだ。話題を変えたいと思ったのか、姉は台所の窓を羊羹を刺したままの黒文字で指差した。

「もうすぐ咲きそうだね」

「え、……うん」

窓から葉っぱだけがわずかに覗く桜は、風に吹かれて小刻みに震えている。大切な桜だった。みんな、気にしている。

「咲いたらお花見しようか」

明るい声を出して姉が言った。昔はよく、この小さな桜の木を見ながら家族でお花見をしたのだった。公園などで管理されている桜に較べれば貧相で花も少なく、――だからというわけでもないが――いつからかやらなくなっていた。

医師から宣告されている父の余命は来年には届かない。せめて、もう一度したかった。その気持ちに偽りはない。姉も、そうだろう。しかしわたしには姉の態度が、最後に区切りをつけるような、思い出にしまいこむための形式上の手続きのように見えて、自分がすごく苛立っているのを感じていた。努めて穏やかに「そうだね」と返すと、姉はすっごい豪華にお弁当作ってやる、と息巻いた。

それから夜になり、姉はわたしたちと一緒に夕飯を食べてから帰宅した。落ち着いたところでお茶を淹れなおして、父の寝室に向かう。

「起きてる？ あたらしいお茶、持ってきたよ」

「ああ、ありがとう」

父は病気をしてから読書ばかりしている。いまも布団に横たわりながらハードカバーを重たげにひらいていた。わたしが疲れるからブックスタンドを買ってあげるよと提案すると、「この重さが良いんだよ」と父は答えた。不便さが生きていることを実感させるのだそうだ。父は昔から変なことにこだわりをもつ。わたしには理解できなかったが、好きなようにさせてあげるべきなのだろう。

「桜の木、もうすぐ咲きそうだな。芽が膨らんできていたぞ」

父はにこやかな顔で桜の話を持ちだした。昼間の会話が聞こえていたのかもしれない。

「おとうさんも気にしてたんだ？」

「当たり前だよ。この家を買ったときに植えた木だからな」

何かを思い出すような遠いまなざしで父は言った。父にとって母との思い出がたくさん詰まっているという桜の木。幼い頃に何度も聞いた。わたしにとっては父との思い出の詰まった桜だった。

皺の寄った大きな手。土気色のやや血色の悪い肌。まだ病院へ行った疲れがとれていないのかもしれない。それでも父は顔に穏やかな表情をのせている。わたしは父の隣に腰掛けると、父の手が疲れてしまわないように読んでいる本を脇から支えた。

「何を読んでいるの？」

「隆達節の本だよ」

「りゅうたつ、ぶし？」

「江戸時代なんか流行った小唄だよ」

「ふうん」

「面白い話があってね。君が代の

『君が代は
千代に八千代に
さざれ石の
巖となりて
苔のむすまで』

という歌詞があるだろう。あれは元々ラブソングで、この隆達節からとられたって説があるんだよ」

「へえ。……でもどこがラブソングなんだろう？」

わたしにはあまりピンとこなかった。

「君の幸せが、未来永劫いつまでも続きますように、って意味にとれるだろう」

「ああ。なるほど」

「実際にはもっと昔の、古今和歌集からこの歌詞はでていて、そのときは天皇の治世を願ったものだったらしい。でもいつからか『君』が愛しい人を表すようになって、様々な祝言の場で歌われるようになったんだよ」

父は得意満面に語った。

「でも君が代って色々言われているからなあ」

わたしは今までちゃんと君が代を歌った記憶もないし、なんとなく歌いづらい。世間でのごたごたからあまり良い印象を与えてくれる歌だと思っていなかった。

「いろんな政治的要因があって問題になっているのかもしれないけど、それは最近のことだよ。そんな問題以前にこの歌詞は日本人が古くから歌ってきたものに違いはないんだからね。変に理屈をこねたりしないで、大きな心で歌いたいときに歌えばいいんだよ」

「ふふ。そうだね」

わたしは頷いた。愛しい誰かを想う唄が、いまでは国の賛歌になっている。滑稽だと思うと同時に、素敵なことだと感じなくもない。それぞれ大切な人の幸福がずっとずっと続くようにと、誰もが歌うのはなんとなく気持ちがあきうきする。わたしがそう言うと、さすがに小学生が愛を歌うには早い気もするけどね、と父は笑った。

それから父はわたしのためにと擦れた声で君が代を歌った。そして自分のために、本の開いていたページから

『夢の浮き世の、
露の命の、
わざくれ、
なり次第よの、
身はなり次第よ』

という歌詞を変な節をつけてながら口ずさんだ。わたしはそのあまりに素っ頓狂な具合に思わず笑い、父も満足げに相好を崩した。ひとしきり言笑したあとで歌の意味を聞いてみたが、父は

教えてはくれなかった。

「ありがとう」

唐突に父はそう言ってさみしげに微笑むと、わたしの頭をやさしく撫でた。わたしは色んな感情が沸きあがってきて、呼吸が止まり、体が固まって、やがていたたまれない気持ちでいっぱいになった。そんな顔をしないで欲しかった。みんな着実に心の整理をしているのだろうか。なんだかわたしだけが置いていかれているのだろうか。

「……あんまり遅くまで読んでちゃダメだよ」

わたしはそんな気持ちを隠すように慌てて父の寝室をあとにした。なにか得体のしれない重たいものが奥につかかって、どうにも胸が苦しい。どうにかして心の平静を取り戻さなくてはいけない気がしていた。わたしはそのままお風呂の準備にとりかかる。浴槽を丹念に洗った。ざらつく部分がなくなるまで洗剤をたっぷりつけて力一杯にこすった。戸惑いも、悲しみも、いまは綺麗に洗い流してしまいたかった。すっかり泡だらけになった浴槽と自分の手足を、熱いシャワーで洗い流す。

すべては変わらずにはいられない。姉も、桜も、そして父も。形あるものはいずれ変わる。

はたして、この想いも変わるのだろうか。

あとは湯船にお湯が張り終わるのを待つだけになった。蛇口を目一杯にひらくとお湯の柱が勢いよく下へ流れ落ちていく。最初激しく音をたてて底を打ちつける透明な液体は、やがて光を含みながら青みを帯びて穏やかに浴槽のなかに溜まっていく。徐々に水位をあげる温かな淀みを眺めながら、わたしは明日が今日と変わらぬ一日であることを願った。

あしがき

素人のつたない文章に最後まで目を通して頂いてありがとうございました。

このお話に興味を持って読んで頂いたすべての方に感謝をいたします。

.....少しでも楽しんで頂けましたでしょうか？

このお話はもともと練習の一環として書いていた三題噺で「ハードカバー・浮き世・パパ」という題目からイメージを得たお話です。

何度か書き直していくうちに、いまの形に落ち着きました。

書く上でもっとも苦しんだのは娘の年齢でした。

もともとが「パパ」という題材だったので小さな女の子として書いていたものを、今回のお話にするべく妙齡の女性へと書き換えました。

父娘の関係を描き出すのにはたしてこれで適切だったのかどうかは、今でも自分の中で答えは出ていません。

ちなみに"君が代"という比較的にデリケートな素材を使用してはいますが、そもそも私にはいかなる政治的思想も主張もありません。

(ただ「浮き世」という題材から導き出されただけですのであしからず)

ただただ柔らかな家族を、穏やかな家庭を、と思いペン(正確にはキーボード)を執りましたが、思惑とは少し違う方向に作品は出来上がっていきました。

気ままに書いた結果ですので、これはこれでいいかな、と思う所存です。

2011/09/27 第一版

恵賭

コメントに感想など頂けると幸いです。